

# 普及事業「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」-見て・さわって歴史体験-について

白鳥 章

## 1. はじめに

「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」-見て・さわって歴史体験-は、平成11年度（以下、「平成」を省略。）から開始された事業である。

この事業の趣旨は、財団法人千葉県文化財センター（以下、「センター」という。）が仮保管する多量の出土品の中から教材用としてセットを作製し、県内の学校又は公民館等の社会教育施設に提供（貸出し）することにより、有効活用してもらおうところにある。

11年度は、初年度ということもあり、要項の作成とセットのサンプル作製を行った。また、試行的措置として、センターが協力校（小中高校）を選出し、活用を依頼した。その結果、良好な成果が得られ、次年度からの本格的な実施への明るい見通しが持てた。

さらに、13年度からは、千葉県教育委員会の委託事業も新規に加わり、センターの事業と同時展開する運びとなった。また、事業紹介のチラシを作成し、市町村教育委員会をはじめとして、学校、公民館等に配布した。

本事業は、14年度で4年間の実績を積んだことになるが、「総合的な学習の時間（以下、『総合的学習』という。）」の完全実施も追い風となり、年々申請数が増加してきている（表1）。

本稿では、「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」の事業の詳細と実例・実績を報告し、学校教育及び社会教育（生涯学習）における本事業の役割と課題について述べてみたい。

## 2. 事業の概要

### （1）セット作製のコンセプト

「セット」とは、各時代の実物資料と写真・説明パネル等の備品で構成された1組の収納箱を指す。以下、セットのコンセプトを説明する。

① 基本的には、全て実物資料であり、極力、完形資料（接合資料を含む）から選出する。事業立ち上げ時において、完形資料の選出に躊躇したが、専門的知

識がない児童生徒及び教員には、破片から土器・石器の全容を想像することが困難なため、完形資料から選出することにした（写真1・2）。

ただし、木製品・金属製品等、微細・脆弱・学術的価値の高い資料は対象外とする。

② 実物資料を選出する遺跡は、全ての整理作業が完了した事業から選定する。

③ 1セットの内容は、旧石器時代から中近世までで構成するのを原則とする。しかし、1遺跡で全ての時代を網羅できるとは限らないので、その場合は、複数の遺跡の資料を組み合わせることもある。ただし、その場合であっても、同事業内の近隣遺跡で作製するよう心がけている。これは、将来的に、譲与の手続きが完了した場合、セットを解除し、元の収納箱に戻すときに混乱を生じさせないためである。

④ セットの対象とする遺跡は、地域性に偏りがないように配慮する。これは、申請のあった学校にできるだけ近い遺跡の資料を提供するのを原則としているからである。

⑤ 本事業の特長は、実物資料に直に触れることができることにある。事業名のサブタイトルが「-見て・さわって歴史体験-」となっている理由はそこにある。

⑥ 1セットにおける実物資料の点数は、50点を平均とする。これは、1セットの箱数6箱程度（写真3）に収まる量であるからである（公用車に積載するのに適量の箱数でもある）。

また、資料には、1点ずつ通し番号のシールを貼り、キャプションと連動させる。キャプションの内容は、小学校高学年を対象とし、できるだけ専門用語は使わないように配慮する。また、適宜ふりがなも付ける。

⑦ 本県では、弥生時代の資料が希少であるため、各セットに適切な資料を標準装備するのは、極めて困難である。よって、出土量が豊富な遺跡から弥生土器だけのセットを複数組作製し、他のセットに随時付帯させる方法をとっている。

⑧ 実物資料のほかに、資料を補足するための解説パネルや写真パネルを各セットに常備する。また、体験学習を支援するための「黒曜石の切れ味体験セット」、  
「縄文土器の文様付け具(縄文原体)」も常備する。

⑨ 「勾玉づくり」と「火起こし」の体験学習用の道具を保持する。これは、あくまでもオプションであり、「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」の申請があった学校等から体験学習の要請があった場合にだけ、貸出しすること  
にしている。

貸出し方法は、基本的には出前授業方式で行い、センター職員が児童生徒に勾玉づくりや火起こしの仕方を実技指導する方法と、事前に教員に実技講習を受講してもらい、道具だけを貸し出す方法とがある。

⑩ 実物資料の収納箱のほかに、備品類だけを収納した箱を1箱付帯させる。備品の内容は、下記のとおりである(写真4)。

- ア. 事業名パネル
- イ. 年表パネル
- ウ. 時代名パネル
- エ. 写真パネル
- オ. 説明パネル
- カ. 展示台にかけられるテーブルクロス(約4m×0.9m)
- キ. 黒曜石の切れ味体験セット(黒曜石の破片、カッターマット、軍手、新聞紙)
- ク. 縄文土器の文様付け具(原体各種、油粘土、粘土板、熨斗棒)
- ケ. センター制作のビデオライブラリー
- コ. その他
  - a 展示具
  - b カラーフィルム(申請校の活用記録用。記録後センターに提出)
  - c 申請のあった学校周辺の遺跡分布地図のコピー(学校資料用として提供)

(2) セット作製の手順

① セットの対象となる遺跡を、移管整理が完了した事業から選定する。



② 選定した資料の挿図・写真図板を報告書からコピーし、ファイルする。



③ 収蔵庫から搬出する。その際、元の収蔵箱に搬出記録のラベルを貼る。

④ 資料を時代別に並べ、通し番号のシールを貼る。

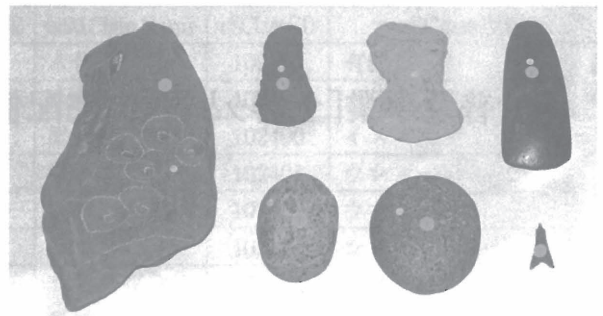
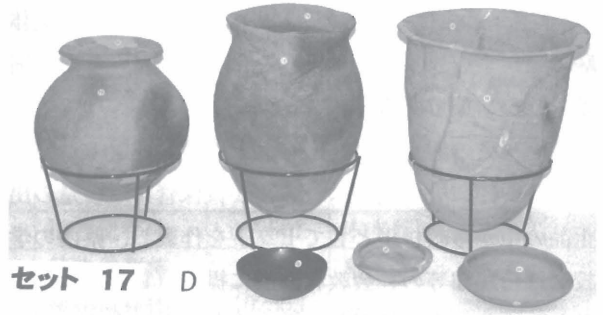


写真1 石器のセット例



セット 17 D

写真2 土師器のセット例



写真3 1セットの集合写真

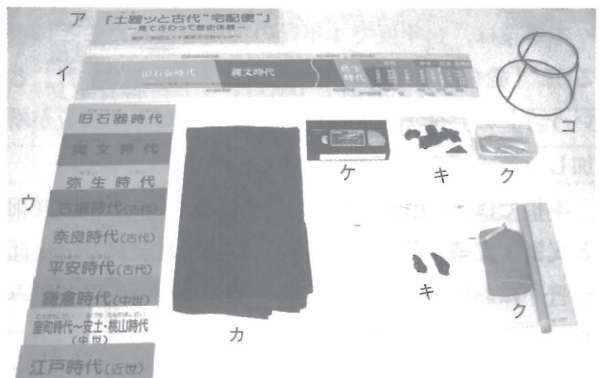


写真4 備品の内容

⑤ セットの一覧表を作成する。



⑥ 各時代別に、資料の集合写真を撮影する。



⑦ キャプション及び備品を作製する。



⑧ 資料を梱包し、収納箱に収納する。

### 3. 申請から活用終了までの行程

#### (1) 予約方法

活用希望がある団体は、電話又はホームページでセンターに希望を申し込み、センター担当者と調整する<sup>1)</sup>。

#### (2) 申請書の提出と添付書類

予約後、センター所定の申請書を2週間前までに提出する。

その際、申請者は、学習指導計画書又は実施要項等を添付する。これは、セットの活用者が授業の主体者であり、センターはそれを支援する立場であることを意識してもらうことと、センターの担当者が授業内容を事前に把握するためである。また、事前打合わせの資料とすることも意図している。

#### (3) 申請の条件

貸出期間中、鍵のかかる部屋又は展示ケースで保管又は展示できることを条件としている<sup>2)</sup>。

したがって、露出展示している部屋に児童生徒を引率し、授業で活用した場合、終了後は直ちに施錠する必要がある。

また、普通教室にセットを持ち込んで活用する場合は、授業後直ちに保管場所に戻し、施錠することをお願いしている。

なお、活用中に破損した場合は、活用者側で修復せず、センターに申し出ることになっている。

#### (4) セットの搬入・展示・搬出の方法

搬入・搬出は、原則としてセンター職員が公用車で行う。時には、展示ケースも付帯して貸し出し、トラックで搬入する場合がある。

搬入後、所定の部屋又は展示ケース(写真5)に展示する場合は、基本的にはセンター職員と教員が一緒に行う。

#### (5) 事前打合わせ

展示後、教員と活用方法や実物資料の扱い方、出前授業の事前確認等の打合わせを行う。これは、極めて重要であり、セットが有効に活用されるか否かは打合わせにかかっていると言ってもよい。

#### (6) 出前授業

##### ①解説授業の方法

事前打合わせで資料の扱い方を伝達済みであっても、教員が独自で考古資料を解説するには、かなりの専門知識を必要とする。

したがって、要請があれば、セットの解説を出前授業方式で実施している。これまでの実績では、ほとん



写真5 展示ケースの展示例

どの学校が要請してきている。特に小学校・養護学校・盲学校・ろう学校では顕著である(詳細は、第6章参照)<sup>3)</sup>。

近年、学校では、開かれた学校を目指し、外部から専門的な知識や技術を持った人を招請して授業や講座を持つことが奨励されている。したがって、本事業もその一端を担っているといえる。

なおセンターでは、学校から人事異動でセンターに配属され、何年在任の後、学校に戻るパターンが定着している。このような経験を積んだ教員は、学校に戻ってから「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」を早速活用する機会が多い。当然ながら、在職中に専門的な知識と技術を研修しているので、独自で解説授業ができ、教育的効果は絶大のものがある。

また、そのような教員からの口コミで、本事業の評判が拡大していくことは喜ばしいことである。

##### ②体験学習の支援

近年、体験学習が盛行である。今や、体験学習を取り入れている博物館や埋蔵文化財調査研究団体はないといってもよい。

本事業でも、「勾玉づくり」と「火起こし」の体験学習の要望に対応できるようにしている<sup>4)</sup>。ただし、第2章(1)⑨で述べたように、道具だけの貸出しは行っていない。

「勾玉づくり」と「火起こし」の概要は下記のとおりである。

##### 【勾玉づくり】

製作用の石は、印材(落款用)の青田石(ウグイス色)を使用し、美術工芸店に適当なサイズにプレカットしてもらっている。なお、体験学習を実施する際は、申請者側で事前に購入するよう依頼している。

その他、紐と耐水性紙ヤスリ<sup>5)</sup>も同様な扱いとなっている。

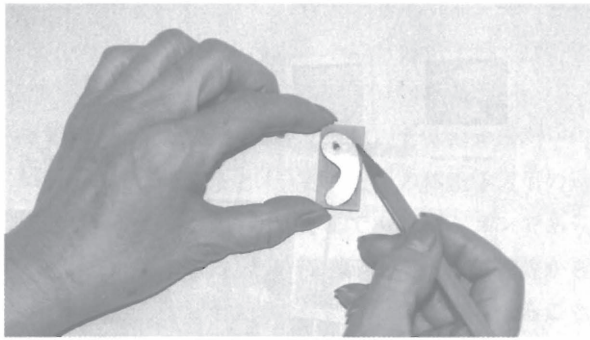


写真6 下絵を描く

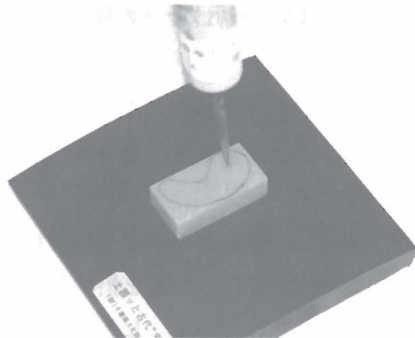


写真7 穴開け

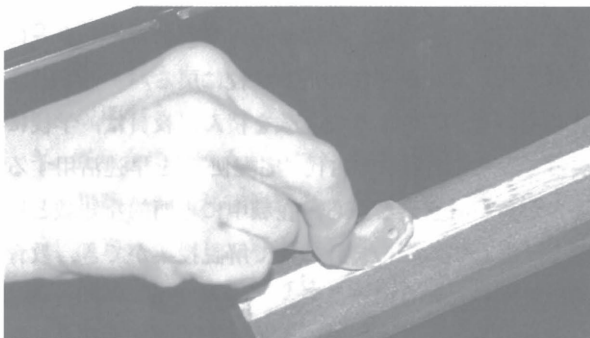


写真8 成形・研磨

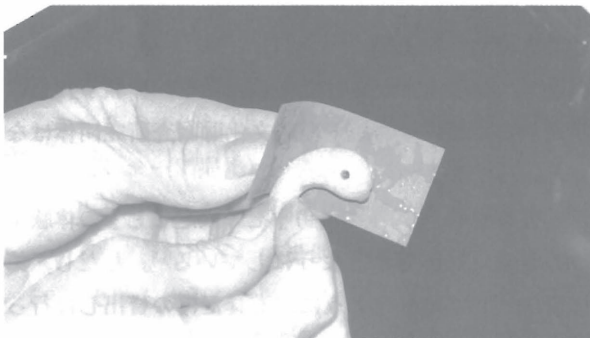


写真9 耐水性紙ヤスリによる仕上げ磨き



写真10 完成

したがって、センターで用意するものは、砥石（溝付き）、四方ギリ<sup>6)</sup>、製作用マニュアル等である。

製作時間は、小学校6年生で2時間平均（解説時間を含む）である。製作者にとって、一番大変なのは、青田石への穴開け作業であり、製作時間に余裕がない場合は、センターで穴開けしたものを持参し、当日引き換えることにしている。

勾玉づくりは、子供から大人まで楽しめる教材である。今後、印材<sup>じゆざんせき</sup>（アズキ色）・把林石<sup>ぼりんせき</sup>（ベッコウ色）などにも拡げ、色のバリエーションを増やしていく予定である。また、今年度は、初めての試みとして、一般者に管玉・白玉づくりの体験も企画したが、これも大好評であった（写真6～10）。

#### 【火起こし】

火起こしの方法は各種ある。最も一般的に行われているのは「マイギリ式」（写真11）であるが、本事業では「ヒモギリ式」（写真12）、「ユミギリ式」（写真13）を多用している。「マイギリ式」を積極的に採用しない理由は以下のとおりである。

- ア. 原始古代にマイギリ式が一般的に使用されていたという考古学的根拠に乏しい<sup>7)</sup>。
- イ. 製作するのに手間がかかり、需要に追いつかない。
- ウ. 紐が切れやすい上に、消耗したヒキリ棒の取換えが大変である。ヒキリ棒の先端だけを取り換えるソケット方式（写真11）もあるが、煩雑である。
- エ. 横木の上下動を回転力に変えるタイミングが児童生徒には難しく、習得できるまでに時間がかかる。
- オ. 学校等に搬入する場合、道具がかさばり、何台も持ち込めない。「ヒモギリ式」「ユミギリ式」だと、20台分梱包しても、センターの遺物収納箱（590mm×386mm×154mm）1箱に余裕で収まる。

以上の理由で、「ヒモギリ式」「ユミギリ式」を主に提供している。なお、最も原初的な「キリモミ式」（写真14）も体験できるように配慮している。そのためにも、児童生徒にとって、最も効率よく発火できる「ヒモギリ式」で火起こしの喜びを体験し、その発展として他の手法も体験できるように各種道具の準備をしている。

また、「火起こし検定表」を作成し、試行したところ、一層意欲を持って取り組む姿が見られた。ただ、若干修正する部分があるので、今後改訂していく予定であ

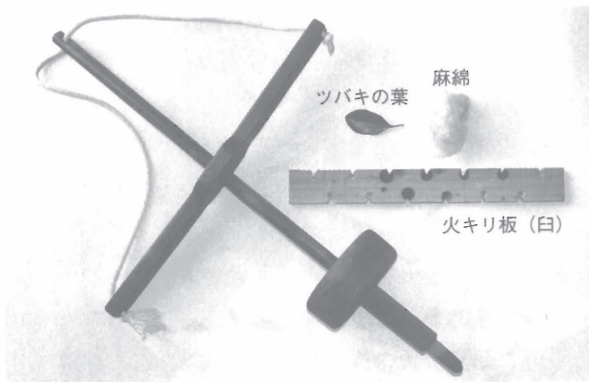


写真11 マイギリ式



写真12 ヒモギリ式

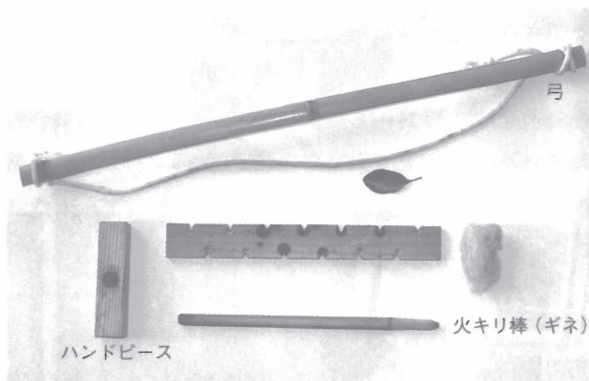


写真13 ユミギリ式



写真14 キリモミ式

る。

なお、火打ち石（写真15）も数セット用意し、時間的に余裕がある場合は、センター職員が試技したり、実際、児童生徒に体験してもらうことにしている。火



写真15 火打ち石セット

打ち石については、時代劇等で見ているようで、興味津々で取り組んでいる。ただ、子ども大人問わず、石と石を打ち合わせて、火を起こすと思いきこんでいる人が実に多いことがわかった。

以上のように、火起こし具はセンターで用意するが、下記の備品は、学校等で準備してもらっている。

ア. 発火用の麻綿（参加者各自1個以上製作する。

夏季は、湿気を吸収しやすいので、製作後は速やかにビニール袋に入れ、密封する）

イ. ツバキの葉など肉厚の木の葉（火種の受け皿で、麻綿に火種を移すときに便利。生の葉がよい）

ウ. 金バケツ（発火した麻綿を投げ入れるため）

エ. ローソク（発火した火をローソクに採火する）

オ. 帽子（参加者各自。頭髮への引火を防ぐため）

（7）活用後の申請者の提出物

「土器<sup>ドキ</sup>ッと古代“宅配便”」を活用した後、申請した団体は、実施報告として下記の書類等を提出する。

ア. 活用報告書（教員又は申請担当者が記入）

イ. アンケート（児童生徒又は一般者が記入）

ウ. 活用記録写真

#### 4. 出前授業の実例

##### （1）セットの解説授業

小学校の場合、ほとんどの学校が、学年単位で実施し、搬入時に展示した部屋で授業する機会が多い。授業時間は、小学校の場合1単位に合わせ、45分を目安にしている。

授業内容は、事前に学級担任と協議し、特定の時代を中心に解説する場合もあれば、各時代の資料を通史的に説明する場合もある。

児童生徒は、出前授業の前に担任の指導のもとで、実物資料に触れ、また若干の解説も受けていることになっている。しかし、疑問点を十分解決できていない



写真16 出前解説授業（小学校）

場合が多いので、出前授業の際に回答することになっている。

14年度から新学習指導要領が施行され、小学校6年社会科では、即座に「米作りむらから古墳のくにへ」（弥生時代から古墳時代）の単元に導入することになった。

したがって、教科書どおりに授業を展開すると、児童に最も人気のある旧石器時代から縄文時代（第6章参照）に触れないまま歴史学習が終了してしまうことになる。

それを補う意味でも、この「<sup>ドキ</sup>土器ッと古代“宅配便”」は、教員及び児童から大変好評である。

## （2）体験学習の様子

体験学習については、前項でも述べているので、写真の紹介にとどめる（写真17～21）。



写真17 火起こし（発火の瞬間）



写真18 勾玉づくり（マイ勾玉の完成！）



写真19 石器（模造品）の切れ味体験



写真20  
縄文土器の  
文様付け



写真21 弓矢の使用体験

## 5. 体験学習の意義

「体験学習ばかりやっているといいの？」という声を時折聞く。これは、「<sup>ドキ</sup>土器ッと古代“宅配便”」に対する意見というより、学校教育や博物館活動への提言といえる。

このことについては、学校教育現場内でも同様な懸念が研究会等で論じられることがある。実は、このテーマは、戦前からある、古くて新しい問題であり、最近話題になっている「ゆとり重視か基礎学力重視か」と

いう問題と近似している。

私見を述べれば、「体験ばかりでは不十分であり、基礎学力の裏付けが必至である。つまり、体験学習と基礎学習は、車の両輪の関係であり、スパイラルに機能しなければならない」と考える。「体験だけでもだめ、理論だけでもだめ」なのである。

ノーベル化学賞を受賞した田中耕一さんは、実験中、薬品の化合を誤った故に大発見をし、それを理論づけた。実験（体験）がなければ、あの大発見はあり得なかったはずである。

体験学習の参加者から、「頭で考えているのと、実際にやるのとはずいぶん違う」「やってみて初めてわかることがたくさんある」などの感想をよく聞く。このように、体験（実験）から学ぶことは計り知れない。まさに、ルソーの言う「learning by doing」であり、体験学習の最大の意義はそこにある。

学校教育（主に義務教育）は、基礎学力を修得させるとともに、人間形成の重要な場である。

一方、博物館やセンターなどの専門的機関（社会教育機関）は、児童生徒・一般を受け入れ、学校等では体験できない学習や知的好奇心を喚起するための場を常に提供サービスしていく所である。

今後、本事業に限らず、センターには、発掘体験や職場体験などの体験学習依頼が増加すると思われる。したがって、学校側もそれを支援する側も体験学習の意義と両者の立場を十分認識した上で実施していくのが望ましい姿であろう。

## 6. 「土器<sup>ドキ</sup>と古代“宅配便”」の4年間の実績

### (1) 年度別提供数の推移

14年度までの実績は、表1・図1のとおりであり、次のことが読みとれる。

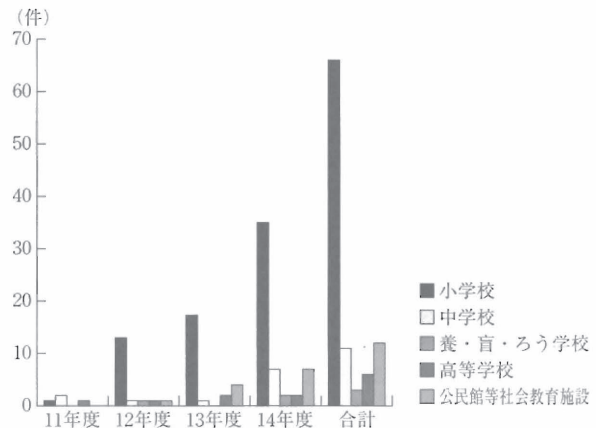
11年度の提供数が少ないのは、第1章で述べたとおり、この年は試行年度であり、試験的にセンターから学校に活用を依頼したからである。

12年度から、本格的な実施を開始したが、本事業が

表1 年度別提供数 (単位: 件)

年度	小学校	中学校	養・盲・ろう学校	高等学校	公民館等社会教育施設	合計	リピーター数
11年度	1	2	0	1	0	4	0 (0%)
12年度	13	1	1	1	1	17	3 (18%)
13年度	17	1	0	2	4	24	4 (17%)
14年度	35	7	2	2	7	53	18 (35%)
合計	66	11	3	6	12	98	25 (平均26%)

図1 年度別提供数の推移



県内の学校に十分周知されていなかったため、小学校以外は大きな伸びはなかった。結局それも、センターから学校へ移動した教員や、センター本部が所在する四街道市内の学校および公民館等に活用の推奨や紹介に頼るところが大きかった。

13年度には、事業を紹介するチラシを作成し、市町村教育委員会、社会教育施設、学校に配布した。併せてセンターの広報紙及びホームページにも随時掲載し、広報に努めた。その結果、13年度より申請件数が若干増加した。特に、小学校と社会教育施設の増加が目立った。これは、13年度が「総合的学習」の移行期間であったことが追い風になったこと、12年度に申請した学校の大半がリピーターになったこと、さらにまた、活用した教員から評判を聞いた学校からの申請が目立ったことなどが挙げられる。

また、考古資料を収蔵していない博物館からの通年申請や、千葉県立手賀の丘少年自然の家のように、建設に先立ってセンターが発掘調査した石揚遺跡の資料を通年提供した事例も新しい動きとなった。

これらは、社会教育施設との連携事例（写真22）であり、資料の有効活用でもある。また、後者は、出土品の「里帰り」として、理想的な事例であろう。

14年度は、急激に申請件数が増加し、前年度の2倍を上回った。これは、本事業が、ようやく学校現場に認知されるようになったのが最大の要因であろう。また、小学校社会科の場合、主に1学期に学習する内容が、総合的学習の完全実施（高等学校は15年度から）により、通年活用が可能になったことも要因の一つと考えられる。

### (2) 月別申請件数

14年度の月別申請件数（表2）を例に見ると、1学期に集中していることがわかる。これは、小学校6学年



写真22 千葉県立手賀の丘少年自然の家での活用

の社会科において、日本の歴史（原始古代）は、1学期前半にプログラムされているからである。したがって、歴史学習の導入部分で活用し、児童の興味関心を喚起させたいと計画する教員の意図の現れである。

表2 平成14年度月別申請件数

(単位：件)

区分	1学期			夏期休業			2学期			3学期			通年計	合計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
小学校	6	8	4	5	0	3	2	3	1	1	1	1	0	35
中学校	1	0	3	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	7
養・盲・ろう学校	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
高校	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
社会教育施設	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	4	7
合計	7	8	7	9	1	3	3	4	2	1	1	1	6	53

ただし実際問題として、4月から5月にかけて極端に予約が集中するため、セットの在庫とセンター職員の手配が間に合わないこともあり、6月～7月又は2学期に活用期間をずらしてもらったことも何件かあった。

2学期に申請した学校の中で、文化祭や教員の研究授業等での活用希望が何件かあったのも特徴的である。

3学期の活用は、歴史学習のまとめとして活用されることが多い。しかし、この時期は、受験と卒業式シーズンのため、年間に見れば、最も申請率は低い。

なお、近年、前期・後期制を導入する学校が増えつつあるが、申請の傾向に大きな変化はないと推測している。

### (3) 14年度提供実績内容

14年度に申請した団体への提供日数の総計は3,019日、活用人数は6,113人であった(表3)。なお、学校の活用人数はあくまでも申請した学年の児童生徒数(小学校の場合は、圧倒的に6学年)であるが、実際は、多学年も参加活用しているという報告がほとんどであった。また、保護者参観で活用される事例もあった。したがって、実数としては、4,304人のおよそ2倍の約

8,600人が活用したと推定できる。

また、手賀の丘少年自然の家では、エントランスホールの展示ケースに常設展示してあり、来館者が館建設に先立って調査した資料を間近に見学できるようになっている。ちなみに、14年度の入館者数は、約7万人と聞くので(来館者のほとんどが見学するという)、これも合算すれば、全体として約78,000人が活用・見学した計算になる。

表3 平成14年度提供実績内容

区分	内容	件数(件)	活用日数(日)	活用人数(人)	リピーター(件)	出前授業日数(日)	体験学習(回)
学校		46	1,500	4,304	14	34	60
社会教育施設		7	1,519	1,809	4	4	4
合計		53	3,019	6,113	18	38	64

学校における出前授業(体験学習)の内訳は、解説授業が28回、火起こしが17回、勾玉づくりが15回、合計60回であった。出前授業を希望するのは、小学校が圧倒的に多い。これは、外部から専門的知識・技術を持った人材を招請し、授業を行うことが推奨されていることの現れである。一方、中学校・高校で希望が少ないのは、考古学の専門的知識を持った教員がいる確率が小学校より高く、教員自ら解説できることが考えられる。また、教科担任制のため、授業のプログラムが小学校のように自由に編成できないことなども理由として挙げられよう。

ただし、4年度から中学校で開始された「選択授業」で活用した事例もあり、今後、同様な活用例が増えると思われる。

### (4) 申請に至るまでの経緯

14年度に「土器<sup>トキ</sup>と古代“宅配便”」を申請した団体から、この事業を申請したきっかけを調べたところ、チラシ44%、現センター職員(主に教員出身者)からの紹介30%、教育関係者からの口コミ15%、ホームページ7%、広報紙4%という結果が出た。

上記の結果から、13年度に作成したチラシの効果が十分現れてきたこと、かつてセンターに在職していた教員又は現センター職員で教員経験のある者からの紹介が圧倒的に多いことがわかる。

このように、知人からの紹介が多い理由は、学校現場では、実物資料を借りる経験が皆無に等しいので、「貴重な資料を壊してしまったら困る」等を考え、申請するのに二の足を踏むからである。したがって、一



度活用した人からの紹介が一番安心できるのである。

ホームページの割合が少ないのは、学校現場は極めて多忙で、なかなかアクセスする余裕がないこと、パソコンの台数も限られていることなどが要因と思われる。また、広報紙は、学校に4部配布のため、各教員に行き渡らないことが率を下げている原因となっている。

## 7. 申請者（活用者）からの声・反応

第3章(7)でもふれたが、セットの活用が終了後、児童生徒又は一般からのアンケートと申請者からの活用報告書の提出をお願いしている。以下、寄せられた感想、疑問、要望等で主だったものを列記してみた。

### (1) 学校

#### ① 児童生徒

#### 【実物資料について】

- ・ 本物の土器や石器は見たことはあったけれど、さわったのは初めてで、とても感動した。もっとじっくり観察したかった。
- ・ どうして古墳時代以降は、土器の模様（文様）が少なくなるのか。
- ・ 土器のそこに穴があいているもの（甗のこと）があり不思議だった。
- ・ 土器をどうやって復元するのか実際見たかった。破片から、全体の形がわかるのが不思議だった。
- ・ 縄文人の知恵は、現代まで生きていると思った。
- ・ 土器は、以外に軽かった。また、土器の手触りがとても良かった。
- ・ 土器の破片もあったが、破片では元の形がわからない。
- ・ 土器は、何千年も土の中に埋もれていたのに変化しないのが不思議だった。



写真23 実物の土器・石器に触れる子供たち

- ・ 埴輪がなかったので、セットに入れてほしい。
- ・ とても貴重な体験ができて（本物の土器などにさわられて）とてもよかった。ほくも縄文人になれたような気がした。
- ・ 本当に土器で煮炊きができるか試したかった。
- ・ 縄文時代の軽石が思った以上に軽くて意外だった。みんなにもとても人気があった。
- ・ 江戸時代の泥メンコが、下総台地の畑でよく拾えると聞いて、不思議だった。自分も拾いたくなった。
- ・ 寛永通宝の価値は、今の何円に当たるのか。
- ・ いろいろな時代の土器や石器にさわられてうれしかった。教科書では見たことのない土器もあった。今まで、歴史に興味はなかったが、興味がわいてきた。
- ・ 本物の土器にさわったり、粘土に縄文土器の文様をつけたりしたので、普段の授業よりとても楽しく、よくわかった。

#### 【火起こし体験】

- ・ 火起こしは大変だったけれど、楽しかったのでまたやってみたい。今度は、違う方法でやってみたい。
- ・ 自分でも、火起こしの道具を作りたいので、マニュアルがほしい。
- ・ 今の時代は、簡単に火がつけられるが、大昔は大変だったことが体験でわかった。
- ・ 自分で起こした火で料理をしてみたい。
- ・ 勾玉づくりが楽しかったので、今度は火起こしをしてみたい（または、この反対の要望もあり）。
- ・ 火打ち石がおもしろかったので、自分でもやってみたかった。
- ・ もっと体験セットを増やしてほしい。自分で体験した方がためになるので。
- ・ 火起こしの体験時間がもう少し長いと良かった。
- ・ 「火起こし検定表」でやる気がわいたが、もっと内容を工夫すると良い。

#### 【勾玉づくり体験】

- ・ 勾玉の石の色が選べれば良かった。
- ・ 昔の人は、実際どのような道具で作ったのか知りたい。
- ・ 勾玉が上手に出来てうれしかった。
- ・ 今回、穴あけに鉄製のキリを使ったけど、大昔の人は、実際何を使ったのか。
- ・ どうして、勾玉はこのような形になったのか。

#### 【その他】

- ・ 自分も発掘をしてみたい。
- ・ 解説がわかりやすく良かったが、写真が小さく

て見にくかった。

- ・ もっといろいろな体験がしたかった。
- ・ ビデオライブラリーの内容が難しい。特に言葉が専門的で難しいし、字幕スーパーがすぐ消えてしまって読み切れない。20分は長い。
- ・ 矢じりを作って、弓矢の体験もしてみたい。
- ・ 火起こし具など、古代人の作った道具は、人の生きる力の現れなんだな。
- ・ どうして遺跡があるのがわかるのか知りたい。
- ・ 写真や解説パネルで、わかりづらいものがあった。
- ・ ガイドブックを作ってほしい。
- ・ 黒曜石の石器が、あんなに切れるなんて、驚きだった。
- ・ 来年もまた学校に来てほしい。
- ・ 黒曜石などの石器の材料は、どこで手にはいるのか。
- ・ 自分たちの学校が遺跡の中にあることを知って、びっくりした。

#### ②申請担当者（教員）

- ・ 本物を直接手にとって観察することができて、とても感動した。勾玉づくりをとおして、古代の人々の物作りに対する工夫や苦労がわかった。また、保護者も自分たちの住む町の近くに遺跡があることを知ってとても喜んでいて。
- ・ 廊下の展示ケースに展示したので、全校の児童や保護者が見ていた。重度の障害を持つ子供も、土器の感触にぬくもりがあるのか、手を添えて何か感じ取っているようだった。セットの搬出後、「なくなっちゃったね」と寂しそうに言って来た児童もいた。自分で作った勾玉は、子供たちの宝物になると思う。
- ・ 自分で作った勾玉を卒業する6年生の首にかけてあげたいという子供がいて、思わぬ教育効果が上がった。勾玉づくりの道具にはたくさんの工夫があり、小学生でも無理なく作れた。
- ・ 本物の土器に触れることができたという体験は、言葉では言い表すことができない感動を子供たちに与えたと思う。また、センター職員の具体的でわかりやすい説明は、子供たちに「原始古代」に対する見方を変えたようである。
- ・ 学区の近くから出土した土器であることが何より真実みがあり、興味を増した様子である。また、手にとってさわることで昔の人のぬくもりを感じることができ、大変感動していた。  
解説と火起こし体験は、大変集中して参加し、と

てもよい思い出になっている。家庭でも多くの児童が話題にしたという。

- ・ 本物のすごさが伝わった。資料集では、土器の感触や重さは伝わってこない。「貴族の世の中なのに、普通の人は竪穴住居に住んで、土器を使っていたんだ」などの感想もあった。
- ・ 体験コーナーの「黒曜石の切れ味体験」「縄目文様付け」に子供たちは満足顔だった。子供たちの関心は、家の近くの畑で土器を拾い、学校まで持って来たことにも現れている。本物に出会ったこれらの時間は、子供たちの中に大きく残っているに違いない。
- ・ 実物に触れながらの授業は、児童・教師共にやりがいがあった。体験学習の重要性を再認識した。この機会を得られたことに感謝したい。来年も是非活用したい。
- ・ 火起こし体験は、保護者会で活用し、保護者にも参加してもらった。子供も親も夢中になり、火がつくと歓声が上がっていた。
- ・ 1学期の終盤に活用したので、復習として、より一層印象づけることができた。土器の重さ、肌触り、火起こしの体験などきっと一生忘れないと思う。子供たちの生き生きとした様子、火がついたときの目の輝きが印象に残った。
- ・ 本物に触れたことは、児童にとってまさに「ドキッ」と心を動かされたようである。
- ・ 研究授業で活用し、授業後の協議の中で、生徒の生き生きとした活動や目の輝きに感心したという賛辞を頂いた。
- ・ 日本史で活用した。本校の生徒は、博物館に行った経験がほとんどないため、実物資料に大変興味を示し、授業効果を高めることができた。

#### (2) 社会教育施設

##### ①一般参加者（子供～大人）

- ・ 子供たちが、本物の縄文土器にふれて楽しそうだった。
- ・ 体験コーナー（石器の切れ味体験、縄文土器の文様付け）が良かった。
- ・ 夏休み中なので、もっと学校などに宣伝した方がよい（公民館への要望）。
- ・ ビデオライブラリーの内容が難しかった。
- ・ ねつ造事件があったが、どのようにして、年代を確定しているのか。
- ・ 勾玉づくりは難しかったが、とても楽しかった。また是非やりたい。

- ・ 発掘現場を見学したい。
- ・ 四街道市に文化財センターがあり、展示室もあることを初めて知った。
- ・ 勾玉づくりは、とてもよい体験で、子供たちのよい情操教育だと思った。

#### ②申請担当者

- ・ コンパクトにまとめられていてよかったが、解説パネルや写真パネルがあればもっとよかった（企画展に連動させたため）。石器の切れ味等の体験コーナーは好評であった。
- ・ 来年も企画してほしいとの要望が年輩者の中からもあった。
- ・ 来館者が必ず通る場所に展示ケースを設置したため、来館者のほとんどが見学することができた。施設の間近から出土した弥生時代の色鮮やかな土器に、子供は元より高齢者も興味を示していた。

#### (3) アンケートの結果

児童生徒に、「興味関心のある時代（好きな時代）はどれですか」と問い合わせたところ（複数回答可）、下記のとおりのお返事が得られた。

表4 小学校における時代別関心度

時代	男		女		合計人数	男女平均%
	人	%	人	%		
旧石器	63	36	56	36	119	36
縄文	118	67	114	73	232	70
弥生	65	37	83	53	148	45
古墳	51	29	57	37	108	33
奈良～平安	25	14	31	20	56	17
鎌倉～室町・戦国	33	19	19	12	52	16
江戸	35	20	21	13	56	17

\*回答人数（男子176人、女子156人）

上記の結果を分析すると次のようになる。

- ア. 男女とも縄文時代が最も興味関心度が高い。
- イ. 旧石器時代から古墳時代までの興味関心度が高い反面、奈良時代以降は急落する。これは、男女とも共通である。
- ウ. 旧石器時代から古墳時代までは、女子の方が興味関心度が若干高い。特に弥生時代は顕著である。これは、卑弥呼や勾玉類をはじめとする装飾品の影響が大きいと思われる。
- エ. 中近世になると男女比が逆転する。これは、戦国時代（もののふの世）が男子に人気があるのが要因と思われる。また、これにまつわるゲームソフトの存在も一役買っているらしい。
- オ. 中学校・高校のアンケート結果は、紙面の都合上省略するが、小学校とほぼ同傾向と見てよい。

ただし、小学校ほど原始古代とそれ以外の時代の興味関心度の差は顕著ではない。また、男子においては、中世が縄文時代の次に人気があるのも特徴的である。

## 8. 本事業の意義と課題

### (1) 意義

センターが多量の出土品を仮保管していることは、冒頭で述べたとおりである。これらの資料を一般に公開するため、現地説明会、出土遺物巡回展、展示室の公開、遺跡研究発表会、広報紙の発行、資料の貸出し、ホームページの開設等の普及活動を積極的に行ってきた。

しかし、それらの展示公開等に出展できる出土品は極限られたもの（学術的価値が高いもの、一般の目を引くもの等）で、資料の大半は、一般の目に触れることがないのが現状である。これは、当センターだけの現状ではない。

このような現状を多少なりとも改善し、県民（主に学校教育）に有効活用してもらふ事業として、「土器ッ<sup>ド</sup>と古代“宅配便”」はスタートした。つまり、「ありふれた資料に光を当てた」事業である。平たくいえば、「報告書刊行以来、展示会や研究者からお呼びのかからなかった土器君、君の出番だよ！」というところだろうか。

これらの資料も、学校等の授業で有効活用できるように教材化し、更に生き生きと体験できるように工夫すれば、「ありふれた土器・石器」も、光を放つのである。本事業の意義はまさにそこにある。

「本物の土器にさわって、感動しました。最初、先生が、さわってもいいよといったとき、本当かなと思いました」（児童）、「今まで、ガラス越しにしか見られなかった出土品にさわりながら学習できるのは、すばらしいことです。子供たちの表情がまるで違います」（教員）などの感想やお便りがそれを裏付けている。本事業のコンセプトをキーワードにすれば、「本物（実物）の魅力・迫力・威力」となろう。これは、「土器ッ<sup>ド</sup>と古代“宅配便”」のサブタイトル「-見て・さわって歴史体験-」に連動している。

時折、「多量の土器片だけを学校に何箱も提供して、自由に活用してもらったらどうか」という声を耳にするが、私は反対である。

かつて教育現場にいた経験と「土器ッ<sup>ド</sup>と古代“宅配便”」業務を担当してきた立場から見れば、教育的効果

は極めて薄いと言える。理由は、以下のとおりである。

① 学校は、多量の土器片だけの提供を受けても、活用できるだけの専門知識と技術を持った教員が、各校に配属されているとは限らないこと。

② 児童生徒（一般も例外ではないが）は、1個の破片から、土器の完全な形を想像できないこと。また、それをカバーするための資料や教材を添付するとなると、膨大なエネルギーを費やすことになり、その割には教育的効果がほとんど得られないこと。

③ 仮に、考古学に造詣があり、歴史教育に熱心な教員がいて、土器片を何箱も受け入れても、その教員が人事異動でなくなった後は、その箱は、倉庫の片隅に追いやられ、邪魔者扱いを受けることが必至であること。結局、処理に困り、センターに引取りを求めてくることが明白であること。

④ 仮に、処分については一切責任を負わないという条件で提供しても、「先人の残した歴史的財産を大切にしよう」「古代人の心や技術にふれてみよう」等の目的で授業をする立場の学校が、それとは裏腹の行為をすることは、教育理念上できないこと。

などが挙げられる。

## (2) 課題

事業は、順調に運営され、学校からの評判も上々である。申請数も年々増加している。しかし、下記のような課題も浮かび上がってきている。

① 1学期の前半（4月から5月）に予約希望が殺到するため、十分対応できないことがある。対応策として、前年度末の予約の推奨、提供（貸出し）期間の短縮、6月以降又は2学期・3学期での活用の推奨、センター他課職員の応援等で乗り越えてきた。それでも、要望に応えられなかったことがあった（10校程度）。

② 県内地区文化財センターや市町村立博物館においても、本事業と類似の事業を行っている場合があり、そことの連携を密にする必要がある。

実際、本年度も、2・3の市町村教育委員会（公民館、博物館）との連携があり、効果を得た。

③ 千葉県全域の学校を提供の対象とするが、搬出入に伴う距離的な制約から、要請に応じられないこともある。この対応策として、博物館等との連携ができれば、教育的効果は大きい。実際、千葉県立関宿城博物館、浦安市郷土博物館など考古資料をほとんど収蔵していない博物館に通年貸し出し、有効に活用してもらっている。

④ 15年度、セットに伴う小冊子（マニュアル・ガ

イドブック）の刊行を予定している。内容は、教員対象の解説書、教員及び児童生徒対象の体験学習マニュアルである。特に、後者（火起こし具の作り方など）に対しては、教員及び児童生徒からの要望が強く、イラスト・写真を多用した親しみやすいものにしたと考えている。

## 9. おわりに

「土器<sup>ドキ</sup>ッと古代“宅配便”」は、順調に実績を上げ、ようやく4年目にして本軌道に乗ってきたところである。

冒頭で述べたとおり、実物の考古資料を学校等に提供（貸出し）するという普及活動は、県内外でも事例が少なく<sup>8)</sup>、事業立ち上げ当初はとまどいの連続であった。

10数年前のことになるが、私が小学校に勤務していた際、実物資料で授業をしたいと思い、ある機関に借用の申入れをしたところ、貸出規程外であることから承認されなかったいきさつがある。

当時、学校に実物資料を貸し出す上に触れることも許可するなど前例がないことであった。結局、自分が考古少年時代に収集した石器や縄文土器の破片数点（郷里の博物館にほとんど寄贈してあるが）を子供たちに見せて触らせるだけにとどまった。それでも、子供たちは、本物の土器・石器に触り歓声を上げていた。自分の少年時代を思い出す一瞬であった。

あの時ほど、器形のよい土器を授業で活用できたらどんなにかすばらしいことかと思ったことはない。

縁あって、センターに赴任し、また、普及事業の業務にだずさわることになり、今度は逆の立場として、学校現場を支援していきたいと考え、この「土器<sup>ドキ</sup>ッと古代“宅配便”」を実施してきた。

学校現場には、授業研究に熱心で、やる気のある教員が数多くいるが、そのような教員の意欲を支援することが、我々の責務であると考え<sup>9)</sup>。

最近、「土器<sup>ドキ</sup>ッと古代“宅配便”」のシステムが、地区の文化財センターや市町村教育委員会等にも波及する動きが見えてきたという。嬉しい限りである。

最後に、本稿執筆に至るまで、11年度以降歴代の資料部長・資料課長には多くの御指導と助言を賜った。

さらに、出前授業等の実務では、資料課・整理課各課員にも大変お世話になった。

また、セットの提供先の担当教員をはじめとし、児

児童生徒の生き生きとした活動や心温まる感想・礼状に大いに支えられた。先人の遺した「モノ」を通して、児童生徒及び教員と「心の交流ができた」と自負している。

末筆ながら皆様に感謝申し上げたい。

なお、本号は、資料課主席研究員渡邊智信氏の手がけた最後の研究連絡誌になる。このような記念すべき号に投稿できたことは、身に余る光栄である。

#### 注

- 1) 小学校からの予約は、4月から5月にかけて特に集中する。理由は、6年生社会科の指導計画では、この時期に原始古代をプログラムしているからである。申請は、先約順のため、年度始めの集中を避けるために、前年度末に予約をすることをお勧めしている。14年度の傾向として、1学期にこだわらず、2・3学期の申請も増えつつあることがあげられる。これは、総合的学習の本格的実施が影響していると思われる。また、リピーターの学校数も増加しているのも特徴的である(表1)。
- 2) 保管展示方法として、下記の方法がある。
  - ① 施錠可能な部屋(郷土資料室・ミニ博物館、多目的教室等)に長テーブル4台を設置し、そこに露出展示する。授業は、そこで行い、実施後は施錠する。
  - ② 展示ケースを廊下等に設置してある団体は、そこに展示し、授業・解説をする際は、ケースから出して行く。
  - ③ 展示する部屋又は展示ケースを保有していない団体は、セット収納箱のまま施錠可能な部屋で管理する。授業等で活用する時は、教室等に持ち出して活用する。
- 3) 中学校及び高等学校は、教科担任制であるため、教員が自分で授業する場合がほとんどである。また、小中高校を問わず、考古学を専攻した教員又はセンターに在職経験のある教員が在職している学校は、本事業を有効に活用している。
- 4) 体験学習の出前授業をする場合、全て、センターが用意するのではなく、教員にも積極的に準備するように依頼している。「センターに任せれば何でもやってもらえて、楽だ」という発想ではなく、「両者ができることは何か」を学校側に認識してもらうことが大事である。
- 5) 紙ヤスリは、400番前後と2000番前後の2種類使用している。前者を細部研磨用、後者を仕上げ用として使用する。
- 6) 木工用のキリを使用するが、新品の場合、先端を2mmほど切断してから使用すると能率よく作業できる。また、時折、先端を金ヤスリ等で扁平に研ぐと効率がよくなる。
- 7) 出土例が皆無に等しい。ただし、ヒキリ白(板)、ヒキリ杵(棒)の出土例は県内でもある。体験学習等で「マイギリ式」が一般的に多用されるのは、民俗例(神社での儀式)からの影響が大きいと思われる。なお、「ヒモギリ式」「ユミギリ式」

は、北方民族の発火方法と言われており、その辺りの歴史的な背景を事前に解説する必要がある。

上記のように、体験学習で気を付けなければならないのは、考古学的な見地になつての体験を意識することである。奇しくも、本稿を執筆中に、今人気の「縄文クッキー」に懸念を示す岡安光彦氏の論説が、新聞に掲載された。筆者も、かねがね「縄文クッキー」には、疑問を抱いており、氏の説に大いに共感できる。特に「クッキー」という表現が一人歩きし、子供たちに現代の洋菓子や、ハンバーグ状の食べ物をイメージさせてしまっているのが気にかかる。ともあれ、出土例が極めて希少な上に、成分分析も不十分である以上、確定的な表現はあらぬイメージを植え付けかねないので、極力避けるべきである。

氏は、「間違つた縄文時代クッキーを作ってしまったとしても、全くの無駄にはならない。子供達が考える出発点になり得るからだ。知識や科学は、誤りを克服しながら生み出されていくものである。今回の問題を通して子供たちがそのことを学べば、それは『総合的な学習』のねらいに完全に合致している」と述べ、「子供たちの人気アイテム・縄文クッキーと考古学の復権」に期待をかけている。

- 8) 関東地区では、埼玉県立埋蔵文化財センター、群馬県埋蔵文化財調査センターなどが、資料の貸出しや人材派遣等を先駆的に実施している。
- 9) ノーベル化学賞受賞の田中耕一氏は、新聞のインタビュー記事の中で、「画期的な技術を売れる製品につなげるのはどこが難しいか」という問いに対し「市場調査ですね。シーズ(新技術の種)よりもニーズです。こういう分析手法ができたから売ろうという技術者の身勝手な考え方だったらなかなか売れない。実際お客さんは何を求めているか、そのためには何が必要か」と述べている。これは、重要な指摘である。「技術者」を「職員」に、「お客さん」を「学校・一般」に置き換えるとよくわかる。私たちが、普及活動を行う際、「学校・一般のニーズは何か。また、それに対する企画者のシーズは何が適切か」を常に意識する必要がある。企画者側の自己満足だけのシーズでは、目の肥えたユーザーは納得しない時代になってきているのである。

#### 参考文献

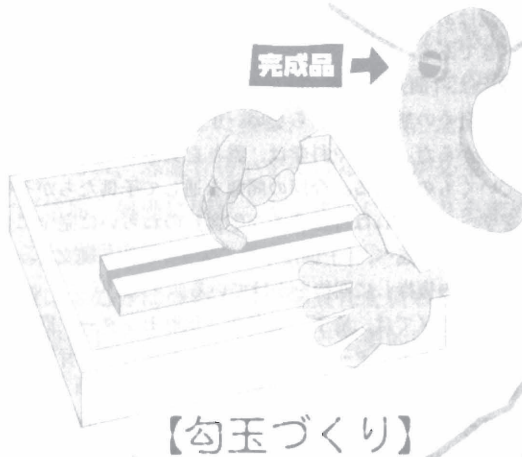
- 桜岡正信 1998 「学校への職員派遣と実例」『平成9年度地域教材開発研究・研修報告書』群馬県埋蔵文化財調査センター 笠懸野岩宿文化資料館・笠懸町立笠懸東小学校2000『小学校の体験学習の現場から』
- 2001 「先生たちと作る歴史テーマ館」読売新聞(10月16日付)
- 関根秀樹 2002『縄文人になる!』山と溪谷社
- 吉長成恭・関根秀樹・中川重年編 2003 『焚き火大全』創森社
- 岡安光彦 2003 「小・中学校で人気の縄文クッキー作り」朝日新聞(3月7日付夕刊)

学校へ「本物の古代」をお届けします!!

# ドキ 「土器ッと古代“宅配便”」

見て・さわって歴史体験

受付中!!



社会科・総合的な学習で活用できます。

【事業内容と申込み方法】

- 事業の内容  
発掘した本物の土器や石器を学校・公民館などに貸し出します。出土品に直接ふれることができ、社会科・総合的な学習・各種講座で活用できます。また、センター職員が出土品の解説や体験学習の指導を行います。
- 貸出資料の内容  
旧石器時代～中近世までの出土品の中から、主だった資料をセットにしてあります。付属として、体験学習用セット（勾玉づくり、火おこしなど）とセンター制作のビデオライブラリー（各時代などの解説・全6巻）も用意してあります。
- 貸出期間  
2週間程度～1年間（更新可能）

- 費用 無料
- 搬出入の方法  
原則として、センターが行います。搬入の際、資料の活用方法と扱い方について、説明いたします。
- その他  
出前授業・各種講座の希望がある場合は、申込みの際にご相談ください。
- 申込み方法  
電話またはホームページ（先着順受付）  
電話受付時間／午前9時～午後5時（土・日・祝日を除く）  
受付後、所定の申請書を提出していただきます。  
申込み先：資料課 電話 **043-424-4849**（直通）

財団法人 千葉県文化財センター

〒284-0003 四街道市鹿渡809-2 Tel.043-422-8811(代表) URL / [www.chibaken-bunkazai-center.or.jp](http://www.chibaken-bunkazai-center.or.jp)



「土器ッと古代“宅配便”」用チラシ